
Double.第五部

Reliah

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double 第五部

【Nコード】

N6000H

【作者名】

Reliah

【あらすじ】

あの時、あの眼を見なければよかった。その澄んだ目で私を見ないでくれれば、私は君を殺す事が出来たんだろうに。／ほんの僅かにそれっぽい描写？が入るので、またもやBLカテゴリへ。今回、登場人物がほとんど男性です……

1・夢もまた現(うつつ)

黄昏時、悪夢は唐突にやってくるのだ。

「レディエンスが攻めてきたぞ！」

怒号にも似た兵士の声で、店先で転寝をしていた青年ははっと目を覚ます。そして、目の前を走り逃げ惑う街の人々。

走馬灯のように早回りで、目の前で孔雀の紋章を掲げた兵士たちが殺戮の限りを尽くしていく。その光景を何度、見ただろう。

やめろよ。

もうこんなもの、見たくない やめてくれ。

必死に目を閉じ、青年は頭を抱える。

これが夢なんてこと、最初からわかっている。けれど、これが現実「だった」ことも、やはり最初から解っている。

記憶にある限り、現実も夢も結局は同じものだ。くり返しくり返し、傷をえぐるように心を蝕む。悪夢と違って間違いはない。

そして、最後には結局夢であるのを知りつつ叫ぶのだ。

みんな逃げろ、と。

悪夢のせいで飛び起きて、まだ深夜である事を知る。夢も最悪なら、汗だくで起きなければならぬ目覚めも最悪なものだった。それに、まだ数時間跳ねる事が出来るのではないかというほど外は真っ暗で。

しかしながら、あの夢の続きを見てしまつのは心底嫌だった。何度見ても同じ結末で、何度見てもハッピーエンドにはならないあの悪夢。けだるい身体をくの字に折り曲げ、青年は頬に張り付いた長い髪をかき分ける。

かき分けた瞬間に視界をかすめる緑に、溜息が洩れた。この緑の髪を見る者は全員、綺麗だとか珍しいだとか褒めたたえるが、青年にとってはあまりいい思い出がある色ではなかった。

やや汗がひいてきたあと、青年は隣で静かに寝息を立てる「家族」を横目で見やる。自分よりも随分小さな体躯の彼は、今もベッドで夢の中　　どうやらあちらは悪夢など見ていない様子で、それならばとそっとベッドを抜け出した。

目指すは階下の酒場。こんな日は、ちょっとくらい酒を飲んだって構わないだろうと思う。あまり酔うという事は無いが、それでも随分と気が休まるのが唯一、酒だった。

降りてみると、眠れない人間はいつでもいるもので　　独特の雰囲気酒場には複数の人間がいた。

宿屋の一階で、昼間は食堂を兼ねているそこは、二十四時間営業しているらしい。深夜から朝方にかけては、大人の世界だ　　なんて、宿の店主が言っていた。

「　　シャインさん、眠れないのかい？んで、何か飲むかね」

酒場のマスター　　というより宿屋の店主が、カウンターに座った途端に親しげに話しかけてくる。数度宿を世話になっただけ

だが、このマスターはもの覚えが良いらしい。何度か来た事がある客なら必ず名前を覚えていた。

「……出来るだけ強いのを、ロックで」

「ん？やけ酒か？」

普通に考えれば、シャインのその要求は当然ながら自棄になって酒を飲みに来たようにしか見えないものだ。それ以上何もいわないでいると、マスターは何やら甘い香りの　だが、少し酒に詳しくれば相当強いであろうとわかる酒を出してくれる。懐から少々上乘せした小銭を出すと、出された酒に口をつける。

小さな街の小さな宿だ、出される酒も妥当な品質だが、悪くはない。

しばらく静かに酒を味わっていると、不意に　柔らかい何かが生なだれかかって来た。噎せるような香水の匂いと、腕に当たる感触　それで何かわからない者はいない。

「　ね、お兄さん。遊びましょ」

なるほど、大人の世界である。飲んでいた酒を置いて振り返れば、胸の大きく空いたきわどいドレスの　恐らく娼婦だろう、まだ若い、白い肌の女がいた。

「おー、色男はもてるね」

何も考えていないのだろう、マスターの茶化す声に、シャインは小さく笑って目を伏せた。

色男というのは間違っていない、この酒場を見渡しても、シャイン以上に目を引くような容姿のものは残念ながいなかった。若干白めの肌と、艶のある長髪。それすらも引き立て役でしかない、整った顔立ち。若干鋭い作りの目は、黙っていればクールな美青年だった。

「残念だが、連れがいるんでね」

普段ならちよつとくらい遊んでやるうかとも思うのだが、少々機嫌が悪くなる要素が女にはあった。軽く睨みつければ、女は怖気ついたかのように目を見開き、仕方ないわね　　と言って去るうとする。

その枝のように細い手を、シャインの手がやんわり掴んだ。

「手癖が悪いな。残念だが、俺には通用しない」

シャインが酔っているとでも思ってたのだらう、後ろに回されていた女の手から、掠め取られていた自分の財布を取り上げる。娼婦のふりをして男から金品を巻き上げる　　こんなものは良くある手口だ。

「な、何よ！気がすんだら話さないよね！」

「おー、乱暴なこつた。女つてのは皆こつたのかね、マスター」

暴れ出す女の手をぱつと離せば、彼女は急に解放された反動でたらを踏み、そのまま憤慨して帰っていく。これが世にいう逆ギレというものか　　なんて思いながら、シャインはまた、グラスの残りに口をつけた。

2・旅商人の憂鬱

「相変わらず殺気立ってやがるな」

開口一番そんな台詞が出るのもどうかと思うが、それ以上にそう言わざるを得ない街並みもどうかと思う。溜息を吐いて、シャインは重い荷物を抱え直す。

傍らで大きなリュックを背負った相方に同意を求めれば、自分よりかなり背の低い相手は小さく頷いた。

はたから見れば、十五、六歳ほどの幼い娘。ゆるくウエーブのかかった草色の髪に、薔薇で飾られたヘアバンドが良く似合う。

本来ならその下には、少女らしいキュートなワンピースがあるはずだ。しかしあまりに寒いため、茶色のローブをしっかりと着込んでいる。

シャインも着込んでいるそのローブは、クライスト領にある商業都市レディエンスに存在する商人ギルドの支給品だった。つまり、このローブは二人がギルドに所属している事を示しており、商人であることを裏付ける要素だった。

商業都市ネクロミアで認定を受けている商人たちは、世界中のギルド支部でサポートを受ける事が出来る。それ以上に商売に対する信頼が非常に高く、茶色いローブを着ている商人は一種のブランドであった。

ギルドで支給されるローブは、どんな環境にでも適応できる、通気性も保温性も良い素材で作られている。故に、旅商人などでこのローブを着て出歩く人間は非常に多かった。

「以前来た時以上に、街全体がピリピリしている気がします」

大きな瞳を伏せ目がちにしながら、相方が呟いた。少女とも少年とも取れない中性的な声は、この街を拒絶しているかのように重たかった。

「イオン、下向くな」

ぼそりと、相方の名を呼ぶ。下を向いて歩いていると、この国レディエンスではいつ何が起こるか解らない。いきなり代行者の標的にされたり、神の代行の現場にぶち当たったり、そんな事はざらにあるのだ。慌てて顔を上げたイオンに、苦笑して軽く頭を撫でてやった。

神の代行とは、この国レディエンスでもっとも有名な習わしの一つだった。とはいっても褒められるような代物ではなく、簡単に言えば国家ぐるみの殺人奨励政策だ。

レディエンスでは、不老不死や人間以上の力を持つ者は汚れた者として扱われていた。現状冷戦状態となっているクライストとは全く反対のその思想から、クライストは平和の国、レディエンスは混沌の国とも呼ばれている。

シャインもイオンも、そのレディエンスの制度が好きではないというより、大嫌いの部類に入っていた。疑わしきは罰せよというスタイルで、近年のレディエンスの「代行」には見境が全くない。数十年の間に激化していった神の代行のせいで、レディエンスはもとよりクライスト側のいくつかの「疑わしい」街や集落も、一瞬にして滅んでしまった。

その中には、最近まで二人が出入りしていた街や取引先も多分に含まれていた。知り合いのいる集落さえあった。長いこと旅をしていた二人にとって、取引先も友人すらも奪っていく神の代行は

そのものが悪なのだ。イオンがこの街を良く思わない気持ちも、サインには痛いほど理解できるのだった。

「数日だ。取引先に荷物を置いて、さっさとクライスト領のほうに戻っちまおう」

宥めるように呟けば、ローブの裾をぎゅっと握られた。甘えん坊な相方を引きずるように歩き、まずは宿を探そうと地図を見た。

宿に荷物を下ろし、二人は溜息を吐く。適当に見つけた安宿だが、無いよりはまし。が、数日はぐっすり眠れそうもない。なぜならここは、レイエンスのと真ん中。旅人から金品を巻き上げる宿なんかざらにあるし、隣の部屋の客が襲ってくるなんて事もある。何度か訪れて経験している事だけに、安心には程遠い。

街自体の雰囲気も、この街は何もかもが常識で考える事が出来ない。というよりは、「良識」で考えられないのだが。

落とした財布がどうなるか。大抵戻ってくるのがクライストだとすれば、絶対戻ってこないのがレイエンスだ。どのくらい治安に差があるかは、歴然だった。

「……しかし、寒いな」

とはいえ、夕方に差し掛かる程度のこの時間では主に神経が向かう先は「寒さ」だ。北国ならではの寒さだが、良く考えてほしい

この国は、クライストとの国境からさほど離れていない地域にあ

るのだ。直前に通って来た国境沿いの村は、陽光に包まれ風が吹き抜ける穏やかな村だったというのに。 娼婦まがいのスリはいたが。

最近のレイディエンスは、気候が目まぐるしく変化しているという話だ。寒暖の差がとてつもなく、昨日は猛暑で今日は雪……なんて事もよくある。

一体どうしてそこまでの異常気象に見舞われるのか謎だが、クライスト領に入るとそう言った異常気象はいきなり成りを潜めてしまふ。

そのせいか、レイディエンスは呪われたんだとか、神の怒りにふれたのだという噂がまことしやかに流れている。それも納得できない話ではないから余計に困るが。

「コーンポタージュ、飲みますか？」

寒さに震えて毛布をかぶると、ローブを羽織ったままのイオンが首を傾げた。外では前を締めていたが、窮屈なのだろう。若干開いたローブの奥には、フリルで飾られたワンピースが垣間見える。

これが男なんだから勿体無いよな。

ぼんやり考えて、シャインは小さく頷いた。ひらひら舞うスカートの下には実はロマンも何もありません。深い深い理由であんな格好をさせているが、本人が文句を言った事は一度だつてない。というよりは、あの姿でいる方が何故か彼らしいと思うようになってしまった。まあ、あの童顔で愛らしい外見に惹かれてホイホイと買い物をしていく人間が多いせいか、今となつてはイオンのあの姿は貴重な商売道具だ。

シャインが頷いたのを確認すると、イオンは微笑みながら、宿に

備え付けの簡素なキッチンに駆けて行く。レディエンスでは毒殺なんて事も日常茶飯事なせい、安宿にキッチンがあるくらいは当たり前だった。自分で作ったものを口にしたいという旅人の方がはるかに多いからだ。

勿論、頼めばあまり美味しいと言えない料理が出てくるが、それを頼んだ事は一度もない。

程なくして、キッチンから良い匂いが漂ってくる。甘ったるいが、温かい匂い。火を使っているせいか少しだけ、部屋も暖かくなり始めているようだ。

「はい、どうぞ」

温かい液体が入ったマグカップが差し出される。たっぷりとコーンの入ったポタージュは、凍えた体を温めるには最適すぎる。丁度腹も空きはじめていたせいか、甘い匂いが食欲をかきたてる。

渡されたスプーンで中身をかき混ぜ、口をつける。熱くて火傷しそうな程のそれは、冷えた体にはちょうど良かった。

「ん、美味しい」

半分くらい「飲む」ではなく「食べる」ものだったが、美味しければ問題は無い。暫し温かいそれに舌鼓をうっている、不意に冷たい風が吹き抜けた。

「え？」

見上げるとそこに、見知らぬ人物の影。赤い瞳が、睨むでもなくこちらを見つめていた。

3・コーンポタージュ

差し出されたマグカップに、赤い目をした青年がはっとした様子で後退する。恐らく、無意識のうちにここにやって来たのだろう。鍵はかけたはずだが、いかんせん安宿だけに開けようはいくらでもある。青年の赤いロングコートの裏に垣間見えたナイフ類に、シャインはただならぬものを感じた。

とはいえ、傍らではイオンが、事もあるうちにその彼にマグカップを差し出している。青年の視線がコーンポタージュに釘付けだった事には、シャインも気付いてはいたのだが。

「……………飲まないんですか？」

イオンは鋭いのか鈍いのか時々解らない。青年が何のために来たのか、なんて事は気にもせず、コーンポタージュを見ていた事だけを汲み取つたらしい。不思議そうに首をかしげる姿に、シャインは頭を抱えそうになる。

こんな場所にいきなりやってくる相手に碌な人間はいない。が、青年に今のところ殺気は感じられない。対応には実際困るところだった。

「……………いいの？」

ぼんやりとした青年の声に、イオンが微笑みながらも一度カップを差し出す。

そこで初めて、青年はカップを受け取った。

まっすぐに伸ばされた、紫の長い髪。蛇を思わせる赤く切れ長の目。クールそうな外見の彼がぼんやりとポタージユに口をつける姿は、一種独特な何かがある。

黙々とスプーンでコーンを掬って口に含むと、青年は「美味しい」と零した。

「良かった。えーっと……」

「アンドロマリウス」

唐突に告げられた単語が、耳にはあまり馴染まなかった。一瞬思考が止まったのか、イオンが瞬きを繰り返す。

「名前。……長いから、マリウスで良い……」

ぼそぼそと呟くように囁かれ、イオンはようやく納得したようだ。じゃあマリウスさんって呼びますね、なんて言いながら、自己紹介なんかはじめだす。

流石にそろそろ、様子見をしていたシャインも頭が痛くなってきた。

どう見ても普通の人間じゃねーだろ、こいつ。

ちらりと、マリウスを観察する。おおよそシャインからすると趣味が良いといえない赤いコートの下には、何かいろいろなものが入り込んでいることが推察できる。先程垣間見えたナイフ、そしてコート表面に若干見える紐の集合体のような盛り上がりは、まず間違いない鞭だろう。

「で、だ。お前さん、何処から来た。一応、鍵はかけてたんだが」

いい加減、ほのぼのとも言い切れない状況に突っ込みを入れる。マリウスは矢張りぼんやりとしながら、シャインを見て「あれ？」と呟いた。

「……匂いにつられて……気付いたら」

返せる言葉がないというか、この場にイオンがいなければ真っ先に怒鳴っていた。アホか、と。

無意識に侵入されたらこっちはたまったものじゃない。コーンポタージユくらいですんでいるうちに早くお帰りになってもらわなければと心の底から思った。これが丸腰の相手なら多少警戒も少なかったろうが、あからさまに武器を所持している相手をずっと部屋に居させるわけにもいかない。

「まだいっぱいありますけど、お代わりしますか？」

タイミング悪く、イオンがにこにこしながらいらぬ気遣いをする。

久々に他人と会話したからってそんなに喜ぶな、バカ！

内心舌打ちしつつ、シャインはもう無理にでもマリウスを帰らせようと立ちあがった。

「こら紫！てめえ、なあーに敵さんと仲良くしてんだ！」

その瞬間、背後から風でも吹いたかのような罵声が轟いた。

弾かれるようにそちらを振り返れば、いつのまにか開いていた

というよりはマリウスが開けていたドアの前に、金髪の女が仁王立ちしている。その片腕には、彼女の細腕で持ちあげられるようには到底見えない巨大な斧。

が、彼女は軽々とそれを肩に引っ掛ける。ずかずかとマリウスに詰めよる彼女に対し、マリウスは慌てて椅子から立った。

「 どう見ても不老種族だろうが、こいつらは！てめーの目は節穴か！？」

マリウスに詰め寄る女の剣幕に、イオンだけでなくシャインも一瞬啞然とする。が、不老種族　その言葉で、シャインの若干の予想はいきなり確定的になった。

不老種族を敵とみなす者、レイエンスだけでなく世界中でもそんな人種はお目にかからない。代行者以外には。

緑の髪、緑の目　例外さえなければその色は、十数年前に陥落したロスヴェルトの民「ドライアド」である。

一定以上の年齢に達すると成長が止まってしまふ不思議な種族で、千年以上を生きる者もいたと聞く。それも、殆どを神の代行によつて殺害されたのだが。

ロスヴェルトという街自体を知るものが少ないうえ、ほぼ絶滅種なためにあまり知る者はいなかったのだが　この代行者達はそれなりの知識を有しているのだろう。

「 イオン」

まだ啞然としたままの少年の手を引いて、シャインはゆっくりと身を引いた。すぐ傍のベッドに置いてあるザックをさっと背負い、代行者二人が口論　というよりも喋っているのは女だけなんだが　している間に逃げようと試みる。

が、そうそううまくいくわけがない事は解っていた。音を立てずに後退しつつも、苦手な言霊を小さく詠唱する。この状況で対応しきれるのは、自分しかない。保護者というのは随分と損な役回りである。

「てめえら、逃げんなよ！？」

思ったより早く、女の方がこちらに気付く。その剣幕に、イオン

がびくりと震えたのが解った。

「……………どう、して？」

仕方なくという面持ちで鞭を構えるマリウスを見て、イオンは泣きそうな声で呟く。友達もいない年頃の彼にとつて、ひと時でも仲良くしていた相手が武器を手に行っているなんて状況は簡単には理解できないのだろう。赤い瞳が小さく細められ、そしてほんの僅か聞こえる声で「ごめんね」と囁かれた。

「明かりよ！」

その一瞬の間を狙い、シャインは用意していた言霊 誰でも使えるが、威力さえ上げれば目くらましには持つてこいのそれを開放する。イオンの目を手でふさぎ、自分は顔を逸らし。

その行動は予想外だったようだ、代行者二人の驚愕の声が上がる。それを確認する間もなく、シャインはイオンの手を引いて宿から飛び出した。

逃げるが勝ち

最初から、シャインには戦うつもりは無いのだ。

4・戸惑いと疑念

あの男！

まぶしさにくらくらとした頭を押さえ、女は舌打ちする。愛用の斧で煌々と輝く光を遮りつつ、ドアを開こうとするも、どんな方法を使ったのか、それなりに腕っ節に自信のある自分でも開きやしない。建てつけが悪いかいいう理由ではなく、どうやら何か「仕掛けて」あるらしい。体当たりで破るといふ事も出来たが、そんな無意味な労力を使うよりは

「窓から出るよ！」

既に復帰し、先程の代行対象が放った光をかき消していたマリウスに怒鳴りつける。こいつさえ情に絆されていないければ、せっかくの獲物を「浄化」出来たのに、半ば責任を彼に押し付け、開けもせずに窓ガラスを割って外に飛び降りる。破片が通行人に降り注いだ、このくらい気にするほどでもない。

着地してあたりを見渡すと、緑色の何かが路地裏にさっと入っていく所が垣間見える。後に続いてきたマリウスは無視して、そのまま追いかけた。

路地裏に入れば、また緑が角を曲がって消える。片方の足が遅いのかも知れない、彼らにそんなに大したスピードは無い。これならば追い付くのも時間の問題と、背後にしっかりとついてきていたマリウスを振り返った。

「し、シトリー？」

「クライスト側に抜けるために、必ず正門に出るはずだ。あんたは

先回り、あたしは奴らを追い回す　　次はへマをするんじゃないよ」

ぎろりと睨みつければ、マリウスはこくこくと頷いて身を翻す。こんな路地裏を通るよりも、大通りから正門へ向かった方がはるかに速いのは誰にでも解る。しかしながら追いかけている連中がそうしなかったのは、大通りを走りまわれば目立つうえに追いつかれやすいためだろう。

「ほんとに大丈夫かね、あいつ……」

今更ながらに心配になる。そして、いつもと印象が違うマリウスに対する疑念　　自分がいらついているせいかもしれないが、何か疑わしい。だが、今はあの二人を追いかけるべきだろう。なんなら意地でも追いついて先に代行してやればいい。無理に納得し、シトリは緑の影を追いかけた。

ドアに仕掛けた陣はあまり意味がなかったどころか、路地に入るうと瞬間聞こえたガラスの破壊音　　それで、逆効果だったかと舌打ちする。単純に窓から出る方が、着地さえできれば移動は早い。仮にも代行者である彼らが、そんな事すらできない間抜けなはずがない　　開けられない窓をぶち破るとは思わなかったのが失敗だったか。

程なく、殺気が背中を焼くようにじわじわと追いかけてきた。この気配は、恐らくあの金髪の女の方か

イオンが居る時点で二手に分かれるという方法は、選択肢に入っていない。脚が遅い上、一人で逃げるなどこの少年には不可能だ。どこかで泣いているうちに殺されかねない。

結局引つ張るように走るが、イオンはすでに息を切らしている。

このままでは、追いつかれるのも時間の問題

「イオン、俺が抱えて走ればお前、魔術が使えるよな？」

「……、は、はい」

自分の体力が少々心配だが、シャインは思い切ってイオンを抱えあげる。驚いた様子で返事を返す少年に、問答無用で「デカイのー発お見舞いしてやれ」と囁いた。

シャインには、イオンが扱うような強力な言霊は到底扱う事が出来ない。秘めている魔力の違いも関係するが、そもその性質が影響しているようにも思える。

そのため体力のないイオンに変わり、自分がおとりになって彼に詠唱の時間を与える　そんな戦法ばかりが板についてきた。

「わかりました」

やや気が進まない様子ながらも、イオンは軽く息を吸い込んで長い呪文を詠唱し始める。先程よりは若干走る速度が遅くなったものの、まだ追いつかれるような距離ではない。程なく、頭上で魔力のうねりが増大する気配を感じ取る。

「　天空の使者の剣よ！」

言霊が放たれた瞬間、中空に幾つもの剣が召喚される。質量を持つて地面に突き刺さっていくそれは、恐らく足止めも考えているのだろう。ちらりと振り返れば、剣の向こうで女が斧を振るっているが、言霊で異界から召喚された剣がそうそう簡単に折れるはずもない。数時間もすれば剣自体は消えるが、良い足止めになっているようにも思える。

「よし　このまま正門まで出るぞ。お前は引き続き後ろを注意してろ」

若干息が切れてきたものの、これならば余裕で逃げ切る事が出来る。安堵して、ペースを保ったまま走り続けた。

「……気が進まないな」

誰もいないレディエンスの正門前。そこでぼんやりと立ったまま青年は呟いた。

先回りして、あのドライアドの生き残りを挟み撃ちに　そう言っ
てシトリーと別れたは良いが、ゆっくり走ったつもりなのに随分と早く辿り着いた。既にあの二人が逃げ出した後であると思いたいが、距離からしてそんな事は不可能だ。そして、あの二人もシトリーも帰りが遅い

もしかすると、シトリーは既にあの二人に追いついて代行を完了させたのかもしれない。それならばそれで、あの緑の澄んだ瞳を見ずに済むから、ありがたいことだ。

イオンと名乗ったあの少女は、どうしてかマリウスにとって「近寄ってはいけない」雰囲気を持っていた。

人懐っこい笑顔と子供っぽい無邪気さに触れた事があまりなかったからだろうか。あれを自分の手で壊せば、何かとても悪い事をしたような　そんな気持ちになってしまいそう。

人の命を絶つことなんて今までたくさんやってきたのに、どうしてあの少女に対してだけあんなにも心揺れてしまうのだろうか。いつともう、目の前に現れないでいてほしい。あの緑の瞳に惑わされるのはもうたくさんだ

そう思ったのに、現実残酷である。

「 やっぱり、先回りしてやがったか」

聞き覚えのある男の声。見上げればそこに、緑の髪的青年と、少女が立っていた。

5・「恩返し」

青年が鞭を構え、地を叩く。ぴしゃりと叩かれた地面はそれだけで抉れ、破壊された石の破片が空中を舞う。

足元に転がって来たその石を蹴りつけ、シャインは杖を構えた。

「出来れば現れてほしくなかったよ」

「そうかい、それはこっちもだ」

どういう意味かは知らないが、残念そうにつぶやく青年に皮肉を返す。現れてほしくないのであれば、逃がしてくれても良いだろうに。

が、彼にとつてはこれは仕事だ。自分たちを逃がせばそれなりに処罰とやらがあるのだろう。特に、足止めたあの女にこっぴどく叱られている所が目には浮かんだ。

それはそれでちよつとばかり可哀想にも思うのだが、情けで殺されてやるつもりはさらさらない。

「イオン」

ぼそりと、背後の少年の名を呼んだ。びくりと震え、イオンはこちらを見上げる。迷いと憂いがない交ぜになった瞳が、ゆっくりと伏せられ

そして、小さく言霊が聞こえてくる。

覚悟は、したらしい。

それを確認すると、シャインは鞭を構える青年　マリウスに向

けて駆けた。走りっぱなしで疲れてはいるが、それでもここを突破するためには文字どおり死ぬ気で行かなければならない。飛び道具を使う相手の弱点は、懐だ。彼のコートの下にはいくつもナイフなどの刀剣類が収まっているが、鞭を持っている間にそれを易々と出す事は出来ないだろう。

マリウスが繰り出す鞭を避けながら、シャインは軽い身のこなしで徐々に距離を詰めていく。近くなれば鞭が当たる確率も大きくなるが、そのくらいの負傷は覚悟の上で

しかし、何故か鞭はシャインをかすりもしない。マリウスが繰り出す攻撃は、どれも間違いないく、シャインが飛びのく事を想定しているような 作威的なものを感じた。

どういつつもりかと相手を見ても、マリウスは無表情で鞭を振っている。どうやら、彼の表情から思考を読むのは難しいようだ。

「地の聖霊の数多あまたの手よ！」

背後で、小さく言霊が唱えられた。イオンが発したその言霊は、マリウスが破壊した石畳の隙間という隙間から植物の蔓を生み出しマリウスの手足に容赦なく絡みつく。

「……！」

手足に絡みついたそれを引きちぎるも、千切れた部分からも蔓が伸び、マリウスに纏わりつく。恐らく、死んでしまうような魔法を使用したくなかったのだろう。蔓の動きは途中から緩慢になり、身動きがとりづらい程度にマリウスの身体に巻きついている。

「ごめんなさい、こうするしかなくて」

申し訳なさそうに呟くイオンに、シャインは上出来だと返す。そして、杖を下して背中へのベルトに引掛けた。

「とどめは刺さなくて良いのかい？」

縛られ、磔にされたように身動きの取れない青年が首を傾げた。何かを訴えるような赤い目は 死すらも恐れていないように見え

た。
いつそのまま首でも跳ねてやれば、今後しばらくは安泰なのだろう、しかし 傍らの幼い少年がそれを良しとするはずがないし、シャイン自体にそんな趣味は無い。

「数時間そこで黙っててくれりゃいいさ」

少なくとも、このままここを出て数時間で国境に辿り着く。急げば、国境付近の村くらいまではたどり着けるだろう。

「イオンって言ったっけ」

通り過ぎようとすれば、マリウスは穏やかに囁いた。赤い瞳が、イオンのほうを見つめる。

それから、恐らく初めて見る事になる笑みを浮かべて言った。

「美味しかったよ、コーンポタージュ」

ざくり、巨大な斧が蔓を切り離す。ドライアドの二人が去ってから効果が薄れたのか、自分が引きちぎった時よりもあっけなく地に落ちる。そして、するすると溶けるかのように消えていった。

「ったく、これだから魔術なんてもんは面倒なんだ」

自分を蔓から解放した女 シトリーが苛ついた様子で斧を地面に突き立てた。何故だか彼女は、昨日からずっと いつも以上に不機嫌だ。

とはいえ、マリウスにはシトリーが機嫌の悪い理由が若干解って

いた。昨日、国境の前で待ち伏せた代行対象に完膚なきまでに叩きのめされたという。しかも、とどめすら刺さず相手は逃げていったのだとか。

普通なら処罰ものの失態だが、彼女を溺愛している父親。レディエンス国王であるルシオンがそんな事をするはずもない。良くも悪くも「きつちりしている」彼女が、失敗したままで咎められないでいるのは気持ちが悪いのだろう。そして、自分があの二人を逃がしてしまったせいでもた、失敗する。彼女にとって二日も連続で失敗続きでは、屈辱どころの騒ぎではないのだろう。

「……もうちょっと礫になっても良かったんだけどな」

彼らを殺す事に気が向かなかったとはいえ、しっかりと仕事を済ませよう。マリウスがそう思っていたのは事実だった。

思いがけない彼らの反撃に、安心半分、主君への罪悪感半分といったところだ。それ故にの発言だったのだが

「てめえ、やつぱり手を抜いただろ」

やはり、シトリーにはそういった心情や言葉の裏に潜ませた思いが伝わるわけがない。そもそもがマリウスとは真逆の彼女と、折り合いがつくのは戦闘の実力のみなのだ。

「父さんを裏切るつもりじゃないだろうね」

ぎろりと、鋭い瞳が自分を睨みつける。彼女の焦りと怒りは、マリウスにもよく理解できる。しかし、その言葉だけは否定せざるを得ない。

「そんな事は」

「なら、さっさとあいつらを追いかけて、首取ってこい。あんな商人二人、あんに代行できないはずがないだろ」

青い目がぎろりと、こちらを睨みつける。

その瞳は、マリウスに対する疑念と僅かな悪意に満ちている。彼

女なりの「憂さ晴らし」というわけだろう。

「わかった」

主であるルシオンの娘にそう言われては、従わないわけにはいかない。頷いて、マリウスは大きな門の外へと歩きはじめる。

「……あんたを育ててくれた、父さんを裏切ったりしたら」

ただじゃ済まないよ

背後から聞こえてくる脅しに対し、胸中でそんな事があるものかと言いつける。けれど、何故だか気分がざわついている。こんな事は、もうどれくらいぶりだろうか。

歩きながらふと顔を上げれば、街道の中央に誰かが立っている。街道で自分を待っているかのように佇んでいたのは、見知った青年だった。

銀色の髪に、シトリーが掛けているものと同じ眼鏡。好戦的な瞳が、その下にあった。

6・ドライブアド

「ガーランドか」

「なんか珍しいな、お前が街の外まで行くつーのは」

目の前に現れた青年は、親しげに　というより、探るように尋ねてくる。その様子から、彼がシトリーの事を気にしているのではと推測した。マリウスの記憶では、ガーランドは以前、シトリーと恋仲にあっただと思う　記憶違いではないだろう、彼らは、私生活も代行もそれなりにうまくやっていたのだから。

が、数ヶ月前に二人は破局を迎えていたはずだった。ガーランドが地位を捨てた　ルシオンのもとを去ったのだ。

その時の彼らの言い争い、というよりシトリーの剣幕は記憶に新しい。気が向いた時にだけ、特定の条件を満たしている相手を代行する「雇われ」になってから、ガーランドは城にはほとんど顔を出さなくなっていた。しかし、時々こうしてシトリーの様子を尋ねに来るのだ。

「お姫様なら最近機嫌が悪い。昨日、代行相手に辛酸を舐めさせられたようだから」

その上今日も、獲物に逃げられてご立腹　そこまで告げると、ガーランドは苦笑して肩をすくめた。

「昨日の件は知ってる、今日のは知らなかったけどな　まあ、ぶっちゃけその用事で顔を出したわけでも、お前を待ってたわけでもねーよ」

眼鏡の位置を直して、彼は軽く頭を掻いた。その表情からほんの少しだけ憂いが見て取れる　彼がシトリー以外の事でもなく、自分に用があつて待っていたわけでもなければ、それこそこの場にい

ること自体がおかしい。今のところ、彼がレディエンスから出る必要は基本的にはないはずなのだから。

「ま、どうせこの先に行くんだろ。誰を代行すんだ」

珍しいというより、おかしい　ガーランドはどうやら、自分についてくるつもりのようなようだった。それも、代行が目当てのように思える。

ますます疑わしい。もしかすると、彼は自分の邪魔をするつもりなのだろうか　以前、ルシオンにほんの少しだけ異を唱えた時のように。

「……雇われの君には関係ないよ。ついてくるのは構わないけれど、邪魔はしないで貰いたいね」

ひとまず、彼とやり合うのは得策ではない。くぎを刺して無難な回答をすれば、ガーランドは「そういうつもりじゃねーけど」と頬を掻いた。

どうせ道なりに出てくる獣や、最近多いらしい魔獣を排除するくらいには役に立つ。肝心の代行の時に邪魔するようなら、彼もいっしょに消してしまえば良い。

ひとりでそこまで納得すると、速足で先を急ぐ。恐らく、近道を使えば国境付近くらいまではすぐに到達する。あの二人はあまり足が速くは無いようだから、どこかで追いつくのもたやすいだろう。

背後からガーランドがついてくるのを確認し、マリウスは国境を目指して駆けだした。

風を湛える村、ヴィント。

この村に訪れるのも二度目だった。朝旅立っただけなのに、夕方になった今、またこの村に辿り着くなんて。

溜息を吐いて、シャインは村の広場にあるベンチに座り込む。イオンを抱えて走ったり、歩きづめで流石に疲れた。

レイエンスの宿に置いてきてしまった依頼の荷物や私物の類はもう諦めているが、これでまた取引先が一つ減った。暫くは、あちら側には仕事すらしに行けないだろう。なにせ、あの首都であるレイエンスを通る以外は海路で別の国まで行く事になる。恐らく顔をばつちり記憶され、宿の台帳もチェックされているはずだ。本名を書かなければいいが、生憎、ネクロミアのギルドでは偽名を名乗る事は禁止されている。海路である国に向かうのは逃げ場を無くすうえ、どうぞ殺して下さいと言っているようなものなのだ。

「ここで泊まって行きますか？」

傍らの少年が、心配そうに首を傾げた。ここから次の街　ネクロミアまで行くのは、時間を考えても危険だろう。一旦山を越えるため、馬車もなければ通常は半日ほどかかる道のりだ。体力が続くはずがない。

小さく頷いて顔を上げる。上がっていた息もそろそろ、落ち着いてきた。ザックを背負い直して立ち上がると、丁度近くの家から人が出てくる所が見えた。

普通なら、それと認識するだけで大して興味を示さなはずなのだが

民家から出てきたのは、二人連れ　遠目から見ると、男と女。紳士風の亜麻色の髪青年と、若干渋めのマントを羽織った「緑の髪」の女性

その二人が、もう一人出てきた女性と仲睦まじく会話して、去る

うという所だった。

振り返った女性の瞳は、緑色のそれ。

ここまで来れば確定なのではないだろうか　彼女は、十数年前に陥落してしまったロズヴェルトの生き残りかもしれない。もしくは、世界中に少数散らばっているらしい同族である可能性がかなり高かった。

宿への通り道であるこちら側に、民家から出てきた二人が歩いてくる。そして、ふとこちらを見て足を止めた。

「　おや、珍しいですね。貴方はドライアドでしょうか」

柔らかな笑みで、女性と思っていた　少年が、尋ねた。やや中性的ではあるがそれなりにハスキーな声、良く見ると男物の衣服　こつこつという人種は珍しくは無い。極端すぎる優男というものだ。特に魔術に秀でていたドライアドには、こつこつた「女々しい」という言葉が似合う外見の者が意外と多くいた。

「あんたも、そうなのか」

確信を持って尋ねれば、少年は少し視線を泳がせ、首を横に振った。

「残念ながら　その血がないとは言いませんが、数百年以上前のご先祖の話です」

クオーターか、それ以上に薄いはず　その言葉に、シャインは一瞬眉を潜めた。それにしても、誰がどう見ても鮮やかな緑色をしている。

どちらかと言えば、宝石のような青緑。角度によってはエメラルド色にも見えるが　記憶している限り、ドライアドと他種族から生まれた者は髪と目の特徴を両方備えていないはずなのだが。

例外的にドライアドと同じような特徴を持つ「ただの人間」も存

在すると、何かの書籍に記されていた。

彼もそういうタイプなのだろうかと思い、尋ねようとした瞬間。目の前の少年が自分を　いや、その背後を見て目を見開く。そして、危ない！　叫んだ瞬間、背中に殺気が突き刺さった。

瞬時に飛びのくと、それまでいた場所に小さな短刀が深く突き刺さる。明らかに殺意を込められたその出所を、目で追うと

「追いついた。　逃がさないよ」

赤い眼の、蛇のような青年がそこにいた。

7・それぞれの思惑

艶のある紫の髪を風になびかせ、青年　マリウスは鞭で地面を叩く。

こんな所まで追ってきたか　半ば冷や汗をかきつつ、シャインは背中に引つ掛けた杖を引き抜いて構える。

ふと　もう一人、見知らぬ男が居る事に気が付いた。銀の髪を三つ編みに結った、眼鏡の男　あれも、代行者なのだろうか。どことなく、昼間の金髪の女代行者に雰囲気似ている。

あの女が獅子なら、こちらは狼という所だろうか　若干獣じみた覇気を感じる。

「アンドロマリウスに、ガーランド　貴方達、代行場所を間違っていますかねえ？」

不意に、背後から　それまで黙っていた亜麻色の髪の青年が、皮肉めいた口調で言う。どうやら、どういう事かは知らないがあの二人を知っているらしい。

前髪で目元を全て覆った青年は、見た目は華奢なもの帯剣している。口の端を軽くつり上げて腕を組む姿は、貴族然としているが、同時にとてつもなくいやみつたらしい。

だがしかし、彼の言う事も事実だった。ここはレイイェンスに近しいとはいえ、間違いなくクライスト領に当たる。そんな場所まで来て代行をするメリットはあるのだろうか。

「おいおい、あんた達とつくに首都に向かっているもんかと思っただぜ　まさか、はち合わせるなんてな」

「生憎、この村で怪我人が出ておりましてね。治療にあたっていた

ら思わぬ足止めを受けていた。それだけのことでしょ」

「ガーランドとか言う男と、緑の髪の少年も互いを知っているかのようにだった。が、和やかに会話をするという雰囲気ではないのは確かだ」

「お喋りは、止そうか」

風を切る鞭の音。それに、全員が沈黙する。赤い瞳が鋭く光った。

「今度は逃がさない」

静かに告げられた言葉は、そのまま「開戦」を意味していた。

狙いの良く定まった鞭が、それまでいた場所を抉り取る。間一髪という所でそれを避けながら、シャインは舌打ちした。レディースの時のような感情の迷いが、いまのマリウスには一切感じられない。これが、あの青年の本気なのだろう。

「なかなか素早いね！」

笑みすら浮かべ、マリウスは鞭を振るう。狂気にも似た表情が、ほんの僅かだが切羽詰まっているようにも見える。追いかけれながら、シャインは軽く地面に杖をつけ、一部を少しづつ抉り取る。同じ手が二度通用するような相手ではないであろうことは、良く理解していた。今回は、恐らくイオンも覚悟をしているのだろう。背後からわずかに聞こえてくる詠唱は、明らかに攻撃呪文のそれだった。

「地底の剣よ！」

背後からの言霊で、マリウスの足元の地面が鋭い刃を形成する。マリウスを追いかけるかのように発生したそれは、鞭の一振りだ簡

単に崩されていった。おそらく、これはイオンの実力の問題ではない。この一帯の土が柔らかいのだろう。それでも、直撃すればタダでは済まない威力を秘めている。

「容赦ないね、イオン」

苦笑するように、マリウスは呟いた。イオンの気を逸らそうとする策なのか、それとも本心からなのかはわからない。しかし、それでイオンの詠唱がびたりとやんだのは事実だった。

「ぐずぐずすんな！」

杖で地面を少しずつつ抉り取りながら、叫ぶ。それから数秒、また詠唱が始まった。

「天から降る黒き雨！」

まさに言霊の通り　そんな、黒い雨をマリウスの上に振らせる。が、眉を潜める程度でマリウスの様子には変化がない。

「……何をしたか知らないけれど、私には効かないようだね」

「……ッ」

イオンが降らせた雨は、身体能力を下げる呪術の類だ。それが効かないとなると、それなりの対策を彼自身が常日頃行っているという事だろう。若干悩んだ様子で、イオンはもう一度違う呪文を詠唱し始めた。

その詠唱を妨げないよう、かばうように鞭から逃げ回っているとすぐ近くから剣戟の音がする。

攻防のすきにちらりと後方を見やれば、そちらでも戦闘が始まっていた。

「剣士が二人、しかも魔術使いね。こりゃー不利だな」

そう言って、ガーランドはグローブで覆われた手を軽く合わせた。

武器を一切持たないスタンスらしい彼は、深呼吸をすると突如地を蹴り、驚くべきスピードで二人の剣士の懐に飛び込んだ。

剣を構える暇などない、猛攻とも言える拳と蹴り上げを飛びのいて避けながら、少年が片手に魔術の光を灯す。

「氷よ！」

詠唱がほとんど必要のない、細切れの呪文　それでも、牽制にするには十分だ。手のひらから放たれる氷の針を投げつけると、ガーランドは軽い身のこなしでそれを避ける。その瞬間に、亜麻色の髪が雷の呪文を落とす。

「ちよつ、死ぬだろバカ！」

間抜けな罵声を浴びせ、ガーランドは翔剣を手にした青年に視線を向ける。顔半分が見えない青年は、口元だけにやりと笑みをこぼし「別に良いじゃないですか、殺るか殺られるかでしょう？」等と言っている。

戦闘しながら漫才をやるな。ちらりと見えた光景に、シャインは思わず胸中で呟く。

だがこの分なら、あちらを気にして戦う必要は無いようだ。投げられてきたナイフをかわし、また地面を杖で抉り取った。

「さつきから何の真似？」

漸く、シャインの行動が不審に思えたらしい。冷たいとも思える静かな声で、マリウスはこちらを睨みつけた。

答えずに、鞭から逃げる。あとのくらい時間が稼げるだろうか。思いながら、足元に落ちていたマリウスのナイフを拾い上げる。

自らの武器で傷を付けられるなんて間抜けな相手じゃあないだろうが、拾ったナイフをすぐに投げつける。　　が、あるうことか、

マリウスはそのナイフを軽々と受け止めてこちらへ投げ返す。

とっさに、杖でナイフをはじく。金属同士がぶつかる耳に痛い音が、集中力を殺いでいく。それに必死に耐えて、シャインはまた、地面を杖で抉った。

「何をたくらんでるのか知らないが、　　!？」

瞬間、苛ついた様子マリウスの表情が変わる。ぴたりと、鞭が唸り声を止めた。

「……貴様、何をした」

ゆつくりと鞭を持った手を下し、マリウスはシャインを睨みつけた。漸く立ち止まれば、マリウスは微動だにしない　いや、そこから動けないのだ。

マリウスの足元は、数か所に穿たれた地面の傷　それすべてを結ぶ、直線状にあった。

「陣術か。それも、魔術と併用しているなんて頭が良いね」

ふと 先程までガーランドと戦っていたはずの少年が、こちらにやってきた。見れば、あちらは決着がついているのか。ガーランドは地面に座り込んで降参していた。

肩越しにそれを見て、マリウスはふつと溜息を吐く。状況をどうにか理解したあとで、鞭を手放すと両手を上げた。

「私達の負け、か。仕方ない。とどめをさすと良い」

近寄ってくる気配に、顔を上げるつもりはなかった。顔を上げれば、あの澄んだ目を見てしまう事になるから。

「クライスト領での代行は、例外なく死罪なんでしょう？ なら、今ここでそうするがいい」

急かすように、マリウスは囁いた。主の望みを叶える事の出来ない私は、どうせ不用品だから。そう、思いながら。

だが、一向に痛みというものはやってこない。身体を貫く刃も、与えてもらえはしなかった。

「……………どうして、代行者なの」

泣きそうな声 これは、イオンのものだ。ほんのひと時だけ、仲良くコーンポタージュを飲んだ、それだけの仲。それなのにどうして彼女は泣いているのだろうか。

「私が、主様の人形だからだ。代行者になるためだけに、私は育てられた。だから、イオン。私の事は、もう気にかけないほうが良

い

涙で潤んだ瞳を直視しないように、囁いた。彼の兄だろうか、自分を今この地面に縫い付けているあの男が、イオンを後ろに下からせる。

別に配慮してそうしたわけではないのだろうが、結果的にイオンの目を見ないで済むのはありがたい。安堵し顔を上げれば、ガードが自分の傍に立っている。そして、ぽんぽんと肩を叩いた。

「頼んで殺してくれるような冷徹な奴らじゃない」

どうやら、その言葉は正しいようだった。目の前の敵は全員、既に武器を納めている。これだからクライストの連中は甘いのだ。そうして油断して、いつ何が起ころうかも解らないでしょう。後ろから刺されでもしたら、どうするつもりなのか。

「泣いている子供の目の前で、人を殺めるわけにもいきませんので」
肩をすくめ、先程の少年が困った様子でイオンを見る。震えながら泣いているんだろう、未だに、か細い嗚咽が聞こえてくる。どうして、そんなに泣いてしまうのか　マリウスには、まだ何となく理解が出来ない。

けれど、今すぐに死ねないというのは随分と苦痛である。溜息を吐いて顔を上げると、ふと、自分は腕は動かせるのだという事を思い出した。

「……なら、こうすればいいよね」

気付いてしまえば、問題なんてどこにもないのだ。自らを、自分の手で死罪にすればいい。そうすれば誰も、手を汚さないでいいわけだ。そして、せめてもの自分の主への忠誠も守られる

「　なっ、やめなさい！」

誰かの叫ぶ声、それが自分を制止するよりも前に、マリウスは素

早く短剣を抜き、自らの腹に突き立てた。

暗闇に浮かぶ意識が一つ。ともすれば溶け込んで行きそうな心地良い闇に包まれ、マリウスは薄らと笑みを浮かべた。

死後の世界というものがあるならば、ここは自分にぴったりの場所だ。何もなくて、真つ暗で、とても居心地が良い。きつと意識すらこの闇に溶けた時、自分は死を迎えるのだろうか。なんて素晴らしい事なんだろうか。

レプティール、ああ、なんて忌まわしい子なの。

暗闇でひとり漂っていると、そんな言葉が聞こえてくる。

あの声は、代行によって浄化された母のものだろうか　もつどのくらい前のことだったろうか？

少なくとも、軽く八百年ほどは前か　。

錬金術師の子として生まれた自分は、十の時に「死んで」いた。不老不死を忌むものとする国の方針には、背けない。自分も両親のように、神の代行で浄化されるものと思っていたのに

「レプティール？つまらん名だ。お前には　そうだな、アンドロマリウス　これでどうだ」

急に目の前に現れた、蒼い影。紫色の瞳が自分の傍に近づいて、そこに自分の赤い瞳が写りこんだ。

「アンドロマリウス……？」

「高貴な神の名だ。有り難く受け取るがいい」

至極優しい手つきで自分の頭を撫でる青年　自分の主となった人物。記憶の中の彼は慈愛に満ちていた。そんなものが、仮面である事はとうの昔に気付いていたが。

「お前は今から、私の息子だ。アンドロマリウス・ルシオン・レディエンス　今日からそう名乗るがいい」

ルシオン　それは、目の前の青年、レディエンス王その人のファーストネーム。

忌み子であった自分にそんな名前を与えてくれた、それはつまり彼にとつて自分はそれだけの価値があるという事に他ならない。幼子であるマリウスにでも、それは十分に理解できた。

嬉しいとも、複雑とも、恐れ多いとも思った。けれど、迷わず頷いた。

「私の人形として存分に働いておくれ、アンドロマリウス。　忌まわしいクライストを滅ぼすために。そして、呪われた者たちもお前を苦しめた錬金術も、すべて消し去るのだ」

優しく語る主の、紫の瞳には狂気が潜んでいる。呪詛のように囁かれる言葉に目を伏せ、マリウスは主の言葉を反芻する。

クライストを、滅ぼすために。呪われたものを浄化するために。そして、忌まわしい錬金術さえも消し去るために。

代行者になるのだ　と。

9・たゆたう想い

はっとして、飛び起きる。

嫌な夢を見た　あんな遠い昔の記憶、もうとっくに思い出せないほどに忘れていたはずなのに。

頭がくらくらしして、身体に力が入らない。それでもようやく起き上がれば、腹を覆う白い布が視界に入った。

「　気が、つきましたか」

血の滲む包帯に気を取られていると、真隣から恐る恐る、声がかげられた。この声には聞き覚えがある。

振り返れば、すぐ隣に緑色の瞳。直視してしまっ、すぐに後悔した。

「……うなされていました。ずっと」

心配そうに、寂しそうに歪む澄んだ緑の眼。それが一直線に自分を貫くようで、マリウスはそつと視線を逸らした。

「……そう」

どんな言葉をかければいいのか全く分からない。少なくとも、手元には武器もなければ、自分は半身に服すら纏っていない。その肩を、イオンがそつと押した。

「まだ、傷が癒えていません。暫くは大人しくしててください」

起きていては傷口が開くから。その言葉に、促されるままに横たわった。

抵抗する事も、素手で目の前の少女を殺す事も、今の状態で出来ない事はない。けれど、あの眼を見てしまった後にはどうしてもそんな気分にはなれない。

あのまま放つといってくれば、確実に死ねたはずなのに。

意識を失う直前、自分が何をしたかを思い出した。そして、死んでいない事実を残念に思う。

おまけに、敵である少女に介抱され　こんな事を知られては、恐らく主の怒りを一身に買うだろう。そうでなくたって、既にこのこと国へ戻れる環境でもない。

シトリーの命令は、彼女と、その家族　あの旅商人の男を「必ず処分してくる」こと。家族はともかく、目の前にいる少女を殺す自信はとうの昔に消えていた。

命令を完遂することが出来ない時点で、マリウスの未来は絶望的なのだ。

「……大丈夫ですか？」

「……さあね」

おずおずと尋ねる少女から視線を逸らしながら、適当に答える。大丈夫かと言われれば、大丈夫なわけはなかった。今後の事を考えると頭が痛い。手元には何の凶器もなく、今すぐに自ら死ぬ事は出来そうもない。そして、今後も自分が勝手に死ぬ事は許されないだろう。

「……何故助けたの。私は、死にたかったのに」

溜息と共に問いかければ、イオンはほんの少し俯いて、わからないと呟いた。

「死んでほしくなかった」

最後にそう呟いて、目元を擦る。ほんの少し聞こえる嗚咽が、マリウスの胸をちくちくと刺し貫いた。

「泣くな」

少なくとも、泣かせた原因が自分にあるのは理解した。自分が死ぬとしたから少女が泣く、その理由は未だに理解できないが。

慰めるという行動を知らないマリウスには、泣くなと命令することしかできない。そつと頬に触れて涙を拭えば、緑色の澄んだ瞳が視界に入った。

「……ごめん」

口について出たのは、謝罪。泣くなと言って泣きやめるものではない、そんな事くらい知っている。けれど、どうすればいいのかも解らない。

ふるふると頭を振り、イオンはそつとマリウスの手を握る。一回り以上小さな手は、とても温かい。

寝ている間にも、傷口の縫合や治療術などで体力が随分消費されていたのだろう。ほんのり眠気を覚え、マリウスは握られていない方の手で軽く目を擦る。

「……眠りますか？」

握られた手がほんの僅か離れようとする。それを、無意識に掴んで引き留めた。

自分でも、その行動には驚いたのだが。

如何せん、眠い。驚くのは起きた後でも構わないだろう。どうせ、

もう彼女を殺す事は出来ないのだ。今くらいは、ほんの少しこの暖かさに甘えていても良いのではないか

そんな事を思った自分に驚愕しながら、マリウスはそっと目を伏せた。

「おやすみなさい、お兄さん」

そっと、頭を撫でられたのだろう。すぐ傍で聞こえてくるその声は何となく心地良い。そのまま、マリウスはもう一度闇に意識を落とした。

10・音が消える夜

そつとドアの隙間から目を離し、クレアは静かにドアを閉じる。

振り返れば、そこには茶色いローブを着た青年と、銀の髪を三つ編みに結った青年がテーブルで睨みあいをしている。手元を見れば、チエス　銀色はどうやら戦況が芳しくないようだ。

「シャインさん、ちよつとは手加減して差し上げたらどうです？」
ライトグリーンのを髪をクレアと同じくらい伸ばした青年に、苦笑して問いかける。が、シャインと呼ばれた彼は「そうしてやりたいが」と呟いて相手をちらりと見る。

先程から銀髪の青年　ガーランドと名乗った彼は、一度も勝つことが出来ていない。そもそもあまり頭を使う事は好きではないらしいが、それはそれは見事な負けっぷりである。

「はい、チエックメイト　」
どうやらシャインはこれでも十分に手加減しているらしい。ほんの少しつまらなそうに黒のクイーンを取り、また一つガーランドに負け星がつく。

そろそろガーランドのほうもあきらめがついたらしい、机に突っ伏して湯気でも出しそうな勢いで溜息を吐く。知恵熱が出そうだなどと呟いている彼に、シャインが少し呆れたように笑う。

あれから二日　。

本来ならそろそろ、クライストに戻っていても良い頃なのだが、未だにレディエンスとの国境付近だ。

見切りをつけて帰ろうと思えばそれでも良いのだが、倒れたアンドロマリウスをそのままにしておくわけにもいかない。代行者とし

ての彼の処遇を、クライストでしつかりと定めなければならぬのだ。

しかし、自害を果たそうとしたマリウスの傷は深く 治療のため、こうしてヴィントの村に留まっている。生憎この村の宿には空きがなく、滞在中に怪我の治療で縁のあった老夫婦の家に居させてもらっているのだが。

不在だという彼らの息子の部屋には、意識を失ったアンドロマリウスと、それをずっと診続けている幼い少年 イオンがいた。

先程、目を覚ました所は確認したが 果たしてあの青年は、完治した後どうするのだろうか。

腐っても代行者、今はただ武器もなければ、腹に傷を負っているから何もしないのかもしれない。イオンがどうしてもとアンドロマリウスから離れない事には困ったが、何かあればすぐ解る隣の部屋。自分さえ気を使っていれば大丈夫だろうと判断した結果、クレアの睡眠時間は極端に少なかった。

「眠らなくて良いのですかねえ」

遠めのソファで新聞を開いていた青年 サンジェルマンが、小首をかしげる。亜麻色の髪で目元を覆った青年は、何故かいつも薄ら笑いを浮かべている。何も知らない人間が見たら薄気味悪いと思うかもしれないが、クレアは特に気にしてはいない。

その彼が珍しく、 というか、初めて笑顔ではなくなっている。どうやら、彼なりに心配しているらしい。

「大丈夫ですよ。なにせ、城では三日三晩徹夜で仕事したりしてますから」

くすくす笑いながら椅子に座る。暇そうにチェス盤を弄っていたシャインが、ほんの僅か眉を潜めた。

「イオンが心配なら、俺が見てる。そのモヤシの言う通り、

少し眠ったらどうだ」

「なっ、モヤシ……!？」

クレアが返事をするより前に、珍しくサンジェルマンが悲鳴のよ
うな声を上げて反応する。どうやら、シャインの台詞は彼のコンプ
レックスに触れてしまったらしい。

「失礼じゃないですか、ちょっと」

「あ？どっからどう見ても間違ってる。それにお前、名前が
長いんだよ。サンジェル何とかって、言うたび噛むだろ」

いきなり険悪な　というより、シャインは至極どうでも良さそ
うに一人チェスを始めている。食ってかかるサンジェルマンはと
いうと、その態度に思う所があるのか

腰の剣に手をかける。

「ちょ、ちょっと待ってください、喧嘩は良くありませんって……」

やっぱりこれじゃあ寝るわけにもいかない。シャインの好意に甘
えようかと一瞬思ったクレアだが、自分がいなくなったら最後、こ
の二人が決闘でもはじめかねない。

例の如くガーランドは机に突っ伏したまま。よくよく見れば、そ
のまま寝てしまっているのだが

慌てて止めに入るものの、サンジェルマンは今にも剣を抜いて斬
りかかりそうな殺気を放っている。が、当の相手であるシャインは

やはり、暇そうにチェスの続きをはじめていた。

「……騒がしい、ね」

不意に呟かれた声に、イオンは肩を震わせた。静かに寝息を立てていたはずのマリウスは、先程から始まったらしい外の口論　といつても、一人の声しか聞こえないが　ですぐに目が覚めてしまつたらしい。

起こしたのは自分ではないけれど、少々申し訳なく思う。俯いてマリウスの手を握れば、そつと頭に何かが触れる。

空いている方の手で優しく撫でられ、赤い瞳がこちらを見る。ほんの少し微笑んでいるような表情で、マリウスはゆっくりと起き上がった。

「あ、傷が……」

「平気、治りは早いから」

回復魔法でも癒しきれない傷を負っている彼を、起こすわけにはいかなかった。しかし、押さえようとする自分の手を、マリウスは易々と掴み取る。

「どうせあんな殺気を放たれてちゃ、眠れるものも眠れない」

軽く前髪をかき分け、マリウスは部屋の外に通じるドアを見た。イオンの記憶では、部屋の外には兄と他の三名が居るはずだ。民家を借りているため、この部屋以外に寝る場所はない。あと数時間もすれば皆、リビングで適当に眠っているのだろうか。

殺気というか、ピリピリした気配は確かに部屋の外、リビングからだ。自分達に向けられたものではないが、確かにこれでは寝苦しくもなる。

「多分、サンジェルマン伯爵だね。彼は意外と逆上しやすい」

耳慣れない名前が出てきて、イオンは外にいる名も知らない三名のうちの一人だろうと推測する。誰の事かと思案したのが解ったのか、マリウスが「あの前髪の長い人」と付け加えた。

流石に、二日も同じ屋根の下にいる相手を知らないだなんて恥ずかしくなる。マリウスの安否ばかりが心配で、兄が食事を持ってくるとき以外他の人間と会話すらしていなかったのだ。

「私と一緒にいた銀髪のは、ガーランド。代行者だけど、ただの雇われだよ」

どうやら察しが良いらしいマリウスは、連れていた青年の事も教えてくれる。そんな姿を見ていると、とても彼が代行者だなどと思う事が出来ない。

改めてみれば、マリウスはとても整った容姿をしている。流れるような紫の髪も、あまり手入れはされていないようだが艶があつて美しい。顔立ちはどこことなく、シャープな赤い眼のせいか蛇を思わせる。

その赤い瞳がこちらを見て、不意に微笑んだ。一瞬どきりとして見上げると優しく頭を撫でられる。

「……私は、どうするべきだろうね。多分、もうレディエンスには帰れない」

「……それは、どうしてですか？」

マリウスが目覚めたら、レディエンスに帰りたがるのではないかな。そう思っていたイオンは、何よりもまず不思議に思う。思った瞬間に、問いかけとして言葉になっていた。

「私が、負けたから。……おまけに、敵だった人間に介抱までされているから。主様は、それは酷く怒るだろうね」

主様　おそらく、彼の上司に当たる人物だろう。呼び方からして、レディエンスの国王やそれに近い立場の人間ではあるのだろうが。その主が酷く怒る、それがどんなことかイオンには想像もつかない。けれど、恐らくマリウスにとっても恐ろしいと思える事なのだろう。

かといって、クライストで神の代行を行ったマリウスがこの国に留まり続ける事は、そのものが死を意味する。イオンには、それをどうにか阻止する方法すら思いつく事が出来ない。

俯いて黙っていると、不意に家の内外から「音」が消えた。

11・蛇の覚悟

ほんの僅か聞こえていたはずの虫の声　それが、唐突に消え去った。

その事にすぐに気が付いたのか、まだシャインに食ってかかっていたサンジェルマンすらも黙って窓の外を見る。

「　外に、何かあったようです」

静かに、クレアが呟いた。場の全員　先程まで机に突っ伏して眠っていたガーランドすら、顔を上げて外を見る。

窓の外は闇に染まっている。これから真夜中だというのに、安眠すら妨げてしまいそうな張りつめた空気が漂っていた。

「……窓の外に、代行者がいるよ」

不意に、リビングの端から穏やかな声。全員が振り向くと、そこには紫の髪の青年　アンドロマリウスが、上着も纏わないまま立っていた。腹に巻かれた包帯には、傷口からあふれてかたまった血がべつとりと付いている。

そして、その後ろには不安そうな少女の姿。

「動けるんですか？」

「……傷の治りは早い方だから」

クレアの問いに、青年は静かに答える。そして、目聡くソファーに置かれていた自分の鞭を手を取った。

「おい紫、どうする気だ？」

「……」

その様子に、慌ててガーランドが尋ねる。が、一言も答えることなくアンドロマリウスはドアに手をかけた。

木の扉を開いて外に出れば、冷たい空気が肌を撫でる。それ以上に冷たい 殺気もまた、肌をちくちくと刺し、貫いて行くようだ。軽くあたりを見回せば、視界の端に鮮やかな金。それに視線をやれば、鋭く青い眼がマリウスを捕らえた。

シトリー・マルコシアス

目の前の金色を再認識して、マリウスは鞭を地面に垂らす。既に彼女の目的は、代行だけではないという事くらい解っていた。

「父さんからの命令。 あんたの安否と状況を確認してこいってね けど、その必要はなくなった」

シトリーは特に悲しいというような様子もなく、薄ら笑いを浮かべたまま斧を振り上げた。恐らく彼女の事だ、マリウスと戦う口実が出来た事の方がよっぽど嬉しいのだろう。少なくとも、好かれてはいないが実力自体は認められている。その彼女が自分に思うことなんて、「むかつく」か「ぶちのめしたい」くらいのもの。今は恐らくその両方を存分に実行できる時だ。

ほんの一瞬、ガーランドの事を思い出す。シトリーの事を未だに気にかけている彼がここに出てきたら、もっともつと厄介なことになる。

が、その懸念は早くも大当たりすることになった。

「おい、紫 って、げっ」

考えなしに自分を追いかけてきたガーランドに、マリウスは心の底から「馬鹿」と、声にも出して呟いた。反論が返る前に、シトリーの青い眼がさらにつり上がった。

「てめえら……二人揃って裏切りか。ご丁寧に、敵さんとも仲良くしてるみたいだしねえ……」

静かに囁かれた言葉は、重いというよりも恐ろしい。その場に
いる大半の人間がそう思っただろう。これは相当に怒りに火をつけ
たに違いない、主にガーランドが居るといふ事実で。

「最悪すぎる……」

がつくりうなだれて、ガーランドは頭を抱えた。そのすぐ近くで
は、やはり追いかけてきたイオンがうろたえている。

下がってるんだよ、と声をかければ、イオンはほんの少し俯いて、
それから小さく頷いた。

「本気で裏切るつもり？」

が、シトリーも多少主からの命令を重んじている所があるらしい。
改めての確認に、マリウスはやや考えた後、もう一度背後を振り返
った。

縋るような、済んだ緑の眼と視線が合う。

不安そうにこちらを見上げるイオンに微笑みかけると、緑がはっ
と見開かれる。それだけで、確認は充分だった。

「アンドロマリウス・ルシオン・レイエンスは、クライストで死
んだ。『主様』に、そう伝えてくれるかな」

自分にしては珍しい、満面の笑顔。鞭をぴんと伸ばして一歩前に
出れば、シトリーは眼鏡の下の瞳を細める。

「……わかった。なら、そう伝えておく。けど……」

父さんに報告するためにも、あんたの首落として持って帰らせて

もらつよ!」

威嚇するかのように斧を振るい、構える。シトリーの殺気が、先程以上に膨れ上がる。

「手出し無用だよ」

背後にやってきていた者達に、小さく呟く。鞭を地面に打ち付け、マリウスはもう一步、前に歩みを進めた。

突如、猛獣が突進するかのように金色が地を蹴る。金獅子の異名は間違いいではない、彼女の男勝りのパワーはマリウスにとっては大変な脅威だ。

高く跳び上がり、民家の隣の木の枝につかまる。コートの懐のナイフを取るうとするも、今は鞭以外の武器がない。肉弾戦ではかなり不利だ。

すぐさま飛び降り、苦手な詠唱を始める。追いかけてきた金色から逃げながら、手の中に収束した光を言霊と共に投げつけた。

それを難なく斧の一振りでかき消し、シトリーはまたマリウスを追う。

「お兄さん!」

イオンの叫ぶ声。駆け寄ろうとする彼女を、ガーランドが制止したのが視界の端に見えた。イオン一人が出てきて勝てるような相手ではないだけに、ほんの少しその配慮に安堵する。

鞭を軽くまとめて、マリウスは距離を詰めてくるシトリーから出るだけ遠くへ逃げる。近くに寄られなければ彼女に自分を傷つける術はない。しかし、容易に鞭を放つてもシトリーの斧に断ち切られれば全てが終わる。そうそう生易しい相手ではないだけに、攻撃するタイミングも慎重に考えねばならなかった。

「逃げてばっかりいないで、かかってきたらどうだい!」

痺れを切らしたのか、シトリーが挑発するかのようにつぶや。だが、その挑発に乗るつもりはない。

どう考えてもシトリーと戦うには、装備といい状況といいかなり不利な状況である。もう一度短い詠唱をはじめると、マリウスはシトリーに向かって小さな火の玉の雨を降らせた。

「はあっ！」

気合一閃　その彼女の斧の一振りで、いくつかの火球がはじけ飛ぶ。地に落ちる前に霧散する程度の火球は、数が多いだけに数発、シトリーの髪や肌を掠めた。

焼けた部分を払いのけるシトリーに、漸く鞭を打つ。すぐさま飛びのくシトリーの足元を穿つ鞭は、柔らかい土を簡単に抉る。

「やっとその気になったか！」

次々と足元を狙い鞭を打てば、やや楽しげに金色が飛びのく。斧を持っているというのに、シトリーは軽々と飛び退き、ときにはこちらに近寄るために地を蹴る。

このままでは勝つか負けるか、そのどちらも非常に怪しい。多少危険を冒しても、早々に決着をつけた方が良いだろうか

意を決して、マリウスはシトリーとの間合いを詰める。斧とどちらが早いのか。鞭を振る力強く打ちつけると、鈍い痛みが肩に走った。

12・アンドロマリウス

激痛とも思える痛みが肩を襲い、マリウスは確かな手応えの残る鞭を掴んだまま視線を横に滑らせる。肩口に深く食い込んだ痛みのは正体は、小さな短刀。前を見れば、シトリーが同じものを手にして立っていた。その反対の斧を持つ腕は、マリウスの鞭によって封じられている。

「そんな戦法、いつ覚えたの」
「さてね」

薄ら笑いを浮かべて尋ねれば、シトリーは残っていた短刀を自らの腕に絡む鞭にあてがう。が、鉄鎖の仕込まれた鞭がそうそう切れるはずがない。

ものは試してそういう行動に出たのだろうか、斧でもなければ断ち切れないとすぐに理解したらしい。すぐに、腕を下してこちらを見た。

「一つ失敗したね、シトリー。私に痛みを与えたって、意味はない」

肩に突き刺さる短刀を引き抜いて、マリウスは鞭を強く引く。動けないほどに締めあげられた腕をさらに締め付けられ、シトリーの表情が歪む。普通の人間なら、悲鳴くらい上げていただろう。そのくらい容赦はしていない。

「帰って、主様に全部伝えると良い。私は逃げも隠れもしない」
笑みを浮かべたまま、マリウスは鞭を軽く振るい拘束を解く。その瞬間、シトリーは短刀を投げ捨て斧を振り上げた。

地面に、斧が深々と食い込む。すぐさま飛びのいたが、あのまま避けなければマリウスは頭から二つに分かたれていただろう。シトリーの放つ一撃は、そのくらいの威力は十分に有している。

「……覚悟しとけよ、てめーも不老不死だ。離反したなら、代行者から常に狙われてると思え」

鋭い青の瞳が、マリウスを睨みつける。そして、地面から斧を引き抜いて肩に引っ掛けた。

「手配書もご自由に。そうそう簡単に始末できると思わない事だよ」笑顔で答えれば、シトリーはじつとりとこちらを睨みつけた後身を翻し、闇に消えた。

「……やっと帰ってくれたか」

溜息を吐いて、マリウスは振り返る。その瞬間、腹に何かが思いっきりぶつかった。

驚いて見れば、ふわふわの緑色がしつかりと自分に抱きついていく。震えながら背中に回される細い腕に、マリウスはほんの少し困り顔で俯いた。

巻き直した上にさらに増えた包帯の上から手を触れ、イオンが癒しの言霊を詠唱する。静かにそれを見守りながら、狭い民家のテーブルに全員が集まっている。

改めてみれば、顔見知りが多い。自分の代行対象だったイオンとシャインに始まり、何のつもりかは知らないが付いてきて、結局シトリーに弁解できぬまま残っているガーランド。そしてつい先日、代行の警告が出ていたサンジェルマン・ロジエ伯爵。唯一見知らぬ存在は、クレアと名乗った眼鏡の少年のみだ。

イオンの詠唱が終わり、沈黙が訪れた。そして、まだ自分が一番面識のない人物　クレアが、真っ先に口を開く。

「君達二人は、軍に拘束されることになる」

懐から小さな短剣を出し、クレアはそれをテーブルに置く。鳩の紋章が彫られた短剣は、彼が軍人である事を示していた。

当然の結果か、思いながらマリウスは頷いた。そもそも、こうして彼らが自分の治療にあたってくれたのも、刑罰を与えないうちに罪人を死なせてはいけないから、それだけのことだ。生死を問わずその場で罪人を裁くような国は、レディエンスくらいのも物だった。「とはいえ、先程の事を見ていなかったわけでもないから、少々困っています。その子にも、見逃してほしいと頼まれていましてね」

マリウスの予想に反し、クレアは困ったように頬を掻く。どこか少年らしい部分と大人びた部分を併せ持つ彼が、そこまで厳しい人間ではないという事は理解できた。

クレアの言うその子、とは、不安そうに隣に座っているイオンの事だろう。というよりも、この場で自分をそんなふうに庇ってくれる相手など、イオン以外にいるはずもない。その兄であるシャインや、クレアの隣にいるサンジェルマンに至っては未だに自分を警戒している。

「彼は八百年あまり、ルシオンの部下として働いていた人物です。信用、出来るかは解りませんねえ」

サンジェルマンが腕を組んだまま、こちらを見つめる。相変わらず、長く伸ばされた前髪のせいで思考は読み取れない。以前城に召喚された時も同じように何を考えているかは知れなかったが、相変わらずのようだ。

とはいえ顔を知っているという程度で、親しいわけでもないサン

ジェルマンが自分の事をよく知っている事には驚いた。だがレディエンスには民間の諜報機関も多く、かつクライストとは反対にトップの人間の露出は多い。この程度の情報なら、どこかで小耳にはさむなりして知っていてもおかしくはない。

「処遇は任せるよ。少なくとも犯した罪は事実だからね」

数百年に渡り代行者として生きてきたマリウスには、一つも言い訳できる事はない。その中には、今回だけでなくクライスト領で実行した任務も数多く存在する。

隣で心配そうにこちらを見つめるイオンには悪いが、罪人である自分が彼女の傍に居ていいはずもない。

「君は、ルシオンの部下 だったね」

若干真剣な表情で、クレアは改めて問う。小さく頷けば、眼鏡の下の緑色の瞳が細められる。

「少なくとも、クライストとしては君には十分な『利用価値』がある。そのあたりも踏まえて、今すぐに結論は出せない。そっこの… ガーランド君にも言えることだけれどね」

両手を顔の傍で組み、クレアは改めて一同を見渡す。それから、今度はイオンとシャインに視線を投げた。

「そちらの二人も、代行者に狙われているのなら一度国の保護を受けた方が良く。シャインさんは随分腕が立つようだから、代行者二人を連行する『護衛』として、雇っても構わないですよ。勿論、報酬も出しましょう」

クレアの提案は、それそのものがほぼ「命令」に近い。彼としては、職務を事務的にこなしているだけなのである。そして、わざわざ捨て置いてもいいはずのシャインを名目上の護衛として雇う意

図は、別の所にある。そうでなければ、軍人である彼がそんな無駄な事をするはずがない。

「……どうせ、イオンはそいつから離れたがらないだろうしな。面倒だが、その話には乗らせてもらう」

こいつのせいで、取引先との約束もすっぱかしたしな　そう言うつて、シャインはマリウスを軽く睨む。そういえば彼らが宿を逃げる時、何か荷物を忘れて行っていた気がする。あれは、彼らの商売道具だったのだろう。

ごめんと呟けば、イオンがほんの少し頭を垂れる。一緒になって落ち込む必要などないのに、変わった子である。

「なら、明日からクライストに向けて出発してもよろしいでしょうか」

「はあ……いきなり大所帯ですねえ……」

にこりと微笑んで首をかしげるクレアの、その隣で深いため息が聞こえた。

13・血の復讐

日差しが零れる窓際に立ち、青年は溜息を吐いた。側近から「幸せが逃げますよ」等と言われる事は理解していたが、それでも溜息を吐かずにはいられない。それもこれも、たった今聞いたばかりの耳を疑う知らせのせいだ。

「はつきりと、そう言ったのか」

振り返って、視界に入った金色に尋ねる。きつい眼差しでこちらを見つめる愛娘は、小さく頷いて拳を強く握った。

その手には一筋の赤い跡。恐らく、鞭で締め付けられたという痕跡だろう。いつの間に、あの男はこんな乱暴者になったのかと、また溜息が洩れた。

「まさか、ガーランドはともかくあれが裏切るとはな」

溜息以外には感情の変化を悟る術はない。至極無表情のまま、青年は「下がれ」と呟いた。金色は、その命令に背く事もなくすぐに姿を消す。

「おやおや、裏切り者が出ましたか。内乱勃発もそろそろですかね」
「？」

「……物騒な事を言うな、クロセル」

カーテンの陰から出てきた黒い影、それが踊るように傍に歩み寄り、茶化すように青年の周りで囁く。歌うように、だが嘆く演技を

するように。

全身を黒い衣服で覆った赤い瞳の青年は、物騒な事をさらりと口にする。そうそう簡単に内乱など行われてたまるものか。

振り返って相手を見れば、その表情からは凶器にも近い笑みが浮かぶのみ。裏切り者が出たという事すら、気にかけていないようだった。

「いやしかし、確かに驚きますねえ、あの子、八百年の付き合いだつたんでしょ」

彼にとっても、突然の部下の裏切りは青天の霹靂だったのだろう。だがしかし、ふざけるような態度でそう言われても、全く驚いていないようには見えない。

少なくとも、そんな波乱を楽しんでいるように見える いや、事実楽しんでいるのだろう、これはこういう男だ。

くすくす笑いながら自分に纏わりつく「黒」に、青年は紫色の鋭い瞳で睨みつける。だが、それすら彼には効果がない。予想も理解もしていたが、脅しを通じないのは詰まらない。

「やですねルシオン様」。そんな怖い顔なさらないてくださいな」

やはり薄ら笑いを浮かべながら、クロセルは青年の頬に手をかける。それを振り払い、ルシオンと呼ばれた青年は窓の外に出た。

城下に広がる広大な街並み 広さで言えばクライストよりは若干劣るだろうが、それをさらに下回るほど、この街には人間が少ない。長きにわたる神の代行の影響で、基本的に住人は多い方ではなかった。最近では、原因不明の異常気象のおかげでクライストに避難している国民さえいる始末だ。

それが意味するものは、兵力不足。少ないとはいえ、溢れるように人間はいる。だが、そこから有能な兵を探すのは雲を掴むような話だ。

クライストよりも軍事力に劣るこの国が、立地的にも有利な彼の国に正面から突っ込んで行く事はまず自殺行為

だからこそ、参謀であるクロセルが働いている。クライストを破滅に導くために、ひいては互いの目的を遂行するために。

「盗賊でもその辺のごろつきでも構わん、傭兵を雇え。今までの倍、クライストに代行者を派遣する」

やはり溜息交じりに呟けば、クロセルから「幸せが逃げますよ」等と言われる。そんなもの、もう残っていると思うのか。自問して、ルシオンは目を伏せた。

「……あれの搜索はどうなってる」

バルコニーに寄り掛かり、ルシオンは背後のクロセルに問う。くすくすと笑いながらも、クロセルは「ご安心を」と囁いた。

「クライストに一つ、渡ってしまいました。あと一つ集めれば、奪い返す事も容易でしょうね」

そうすれば、あんな国など一息に滅ぼすことが出来る

背後の黒が、とても楽しそうに笑う。それに合わせるように笑みを浮かべれば、ルシオンは城下の街並みに囁くように言葉を発した。

「ルシウス、これは私からの復讐だ。せいぜい、お前が選んだ道の愚かさを知ればいい」

呪詛のように囁かれた言葉は、背後のクロセル以外誰も聞いていない。軽く肩に手を置かれ、「雨が降りますよ」と囁かれる。

もう一度溜息を吐き、ルシオンは部屋の中へと戻っていった。

第五部
了

あとがき

いつもお読みいただきありがとうございます、Reliahです。

今回は敵側の話が若干多かったかもしれませんが、とはいえ、仲間になる人が多いですが。

今回はじめて出てきたシャイン、イオン、アンドロマリウスは全員主人公という、何とも困った状態です。クレアとサンジェルマン伯爵、ガーランド君もなのでほぼ主人公たちのターン。

何人いるの？と聞かれると、9人います。1〜5部のあいだに、もう全員出てきてますね。

今後はもうほとんど前後を読まなければ理解できない展開に続いて行くんだろうなと思います……。まあ、流石に、ここまで読めばこじか読んでないあそこしか読んでない、なんて事はなさそうな予感もしますが。

10部くらいで終わると良いんですが、終わるのか？な勢い。とはいえ、目安はそのくらい……です。

そうそう、イオンについてですが。男の子ですが大半気付きません、言われない限り。

多分暫く、アンドロマリウス君とか気付かないで過ごしているんだろうなーと思います。今回のほんの少しBLっぽい描写というのは彼とイオンの所に尽きるのですが、相変わらず「腐向けでないBL」です……。そう言うのを期待してくださってる方には申し訳ない限りですが、普通の恋愛関係の人たちもおりますし何とも言えない

感じます。

寧ろこの程度ならBL表記なくても良いかと思うんですが。チキンなんです。すいません。

さて今回、最後の最後でレイエンス側のトップがようやく顔を出しました。タイミングをいつも逃していたので、ここで描写できて一安心。

敵側の情報はあまり描写しないとはいえ、まったく出さないのはテンポ悪いな〜と……

ちなみに、敵側の情報をネタバレでも良いから知りたい！なんて奇特な方には、世界観を共有する相方さんの小説「Northern Light」をお勧めします。

すごく核心から入ってきちゃうので色んな意味でネタバレですが、これはこれにやりとする部分も多くあるかと思えます。

よろしければ、こちらも一度ご拝読くださいませ！

「Northern Light」

<http://ncode.syosetu.com/n56>

38h /

それでは、また第六部でお会いできる事を祈って！

ご拝読ありがとうございました。

Relian

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6000h/>

Double.第五部

2010年10月21日23時38分発行